

名工の伯樂③

明石博高

勤業場とならんで舎密局は明治期の京都府の工業振興に大きな役割を果たしたといえる。舎密局は新しい時代の技術者を養成するために、西欧の化学知識と新技術を若者に伝習させる場であった。京都の伝統産業である染織の発展を顧みるとき、舎密局に付属していた染殿の存在をぬきには考えられない。その染殿の直接の指導者として明石博高の名をあげることができる。

明石は植村正直の協力者として、京都府の殖産にたぐいまれな手腕を発揮したが、行政官としての植村とちがって、むしろ直接的に技官として業績を残したといえる。

明石は幼名弥三郎、天保十三年京都市四条通堀川西入ル唐津町で生まれている。若いころから洋学に興味を持ち、医学、蘭学を修め、明治になつてからは、オランダ人ハラタマ、ボードイン、独人ヨンケルから、化学



生理学、薬物学を学んでいる。ただ単に学問を修めることだけに終らず、それをもとに産業発展に結びつけようとしたところに明石の真価がある。慶応元年には煉真舎という理化学の研究会をはじめ、明治元年には大阪に開かれた舎密局の助手となつている。明治三年十月に勸業掛として京都府に勤務するようになったのは、その深い学識が認められたからである。河原町二条下ル旧長州藩邸に開かれた舎密局は明石の提案によるもので、彼は主宰者として、リモナーデ、イホカラス酒、ラムネなどの飲料、石鹼、冰糖、劇薬、陶磁器、硝子、顔料の製造販売の事業計画を建議している。染殿を直接指導し、西洋の染色法を普及させた独人ワグネルを招き、彼の力を引き出すことができたのも、明石が背後で支援したからだろう。レオン・ジュリーの進言で仏国に留学生を派遣するときも、人選は明石の手に委ねられている。その中に近藤徳太郎、稲畑勝太郎、今西直次郎がいた。彼らは機織、染色、撚糸と、それぞれに西欧の新技術をもたらし、染織の街西陣の再生が約束づけられたのである。まさに伯樂という名にふさわしい。(福本武久)